

『梨の花』について

木村幸雄

I

中野重治の自伝的作品『梨の花』は、一見構成らしい構成もない、もっぱら作者の記憶をたどって少年時代の思い出をめんめんと語った長物語のように思われるが、けっしてそうではない。やはり、そこには作者の追求する一つの主題に即した構成がそなわっており、フィクションが生まれているのである。ただ、この作品の特徴として、場面場面の印象は実にあざやかだが、全体の構成とか主題ということになるとなかなかとらえがたい。したがって、個々の場面としては鮮明に印象づけられても、その意味するところがわかりにくいということが、重要な場面でいくつかある。それも、全体の構成や主題があきらかになるにつれてしだいにわかってくるのだが。……

まず『梨の花』の構造にわけ入って行くにさきだって、二つのことを念頭においておきたい。一つは中野重治の郷土への愛着の問題、もう一つは彼の美意識の問題である。

中野重治は、『梨の花』の「作者あとがき」で、文学者と郷土との関係について、つぎのような考えを述べている。「憎悪・怨恨をもふくめて、私は私を生み育てた郷土にたいして感謝の思いを待つ。それを書きあらわすことは文芸に従うものの一種の内面的義務にもなる。」おそらく、現代作家のなかで、こういう言葉がはけるのは、中野重治のほかにはあるまい。『梨の花』の作者にして、はじめていい得る言葉であろう。この作品は、中野のそういう深い郷土への愛着、文学者としての郷土への溯源志向から生まれた作品にほかならない。

中野の郷土への溯源志向は、ふりかえってみれば、一連の自伝的作品を書きつづけてきた彼の作家主体のなかに根源的なモチーフとして生きつづけてきていたように思われる。というのは、昭

和十四年、自伝的作品の第一作『歌のわかれ』が書きはじめられるすぐ前に、自伝的小説を書くためのいわば足がためとして、「カニシャボテンの花」「日本詩歌の思い出」という二つのエッセイが相ついで書かれていたことが想起されるからである。前者において、中野は郷土の百姓たちの中で艱難に耐えて生きた自分の祖先たちの姿を思い出し、自分につながる「家の血すじ」を再確認し、当時の自分の逆境を一つの宿命と思い定めることによって、時流に抗する自己をささえようとしていたのである。後者においては、その標題からもうかがわれるように、当時日本浪漫派流に日本詩歌の伝統が勝手にいじりまわされるのに抗して、少年時代に自分の詩心をはぐくんできた郷土の童謡や民謡の思い出にまで溯源して、いわば自己の「詩人の血すじ」を再確認していたのである。この二つのエッセイは、『歌のわかれ』から『むらぎも』をへて『梨の花』にいたる自伝的作品の世界全体の土台を固めるために、いわば地中深く打ち込まれた二本のパイロであった。そしてその二つのエッセイにもっとも強い内面的なつながりをもっているのが、この『梨の花』なのである。

中野重治は、『むらぎも』から『梨の花』への関係を「溯源関係」と呼んでいるが、『むらぎも』自体の作中のあちこちに、直接『梨の花』の世界へつながって行く郷土への溯源志向があらわれていたのである。たとえば『むらぎも』の主人公片口安吉は、蚊にやられて弱っている友人を見て、蚊にも蚤にもぶよにも蛭にも負けない「銅色をした皮膚」を見なおして、そういう自分の皮膚をつくってくれた「在郷の村」の少年時代の生活をつぶさに思い出す。また、観念的在翼学生たちのいわゆる「唯物弁証法」談義に辟易しては、つい「在郷の村」の百姓生活のなかにあった一種の

「汎神論」——あれがおれの哲学だぞと居直りたくなってしまふ。そういう郷土への溯源志向が溢れ出て、『梨の花』となったのである。

つぎに、もう一つの美意識の問題というのは、中野重治における美と倫理との結びつき方の問題である。中野は、美と倫理、感覚と思想との結びつきをゆるがせにすることのできない作家である。『むらぎも』と『梨の花』との間にというよりも『むらぎも』の直後に書かれた『広重』は、美意識の変化が根底において人生上の態度の変化とつながっていないという問題を追究したユニークな作品である。それまで好きになれなかった、いや嫌いであった広重の絵が、ある日ふいに好きになる、それに心を引かれるようになるということが、生き方の問題、転向の問題とからめて描かれている。

そうい美意識の変化が、心の変化、生き方の変化に深くつながっているものとしてとらえようとする視点は、そのまま『梨の花』のなかのもっとも重要な視点となっている。それまで全然美しいとは思わなかった「梨の花」がある日突然美しいと見え、それがまた美しいと見えなくなるという美意識の変化は主人公の成長にとって重要な意味をもつものとして描かれていると考えられる。

つまり『梨の花』は、中野重治の溯源志向から生まれ、自己と郷土との結びつき、そこでつちかわれた鋭敏な感受性がどのような美意識と倫理意識とを形成したかを、自分の生い立ちにさかのぼって描いた作品である。

II

≪それは気の毒だったなあと思う。ああ、おばが死んでしまつて、これから昔話をしてくれるものがないだろう。大歳に、村の百姓が殿さまのところへ年貢を持って行って、それを「お蔵鼠」が糞ではかつて、量目が不足すると百叩きにあう。その音と声が、心配で待っているこんのち（この家）の囲炉裡ばたまで聞こえた。そんな話はもう誰もしてくれないだろう。それよりも、馬鹿話を誰もしてくれぬだろうと良平は思う。狐の嫁入りというのは、あれは迷信だろう。おじさんのお父つあんが、中村境の石橋のところで、狐にだまされた女郎の子を目をさましてやった。（中略）それでも、その橋は今でもある。割りに大きな石橋で、あすこは

川副がひろがっているせいでもあるが、ほかの橋とちがつて、橋が円く中高になっていて、良平らはそのへんで鮎釣りをする。泳ぐこともある。橋の上手の橋より大分低くなった川門の切石のところでみみずをつけかえていると、橋の桁のあわいから加賀境の空が見える。橋の中高なところは、さらにその上へ空に浮いて見える。そこを、狐が一匹さきに立って行く。昔ふうの髪の手結い方をした小娘が一人あとからついて行く。（中略）そんなものはいない。橋の上は誰も通っていない。いないけれど、それが見えてくる。ああいう、嘘か作りばなしかわからぬようになる昔話は誰もしてくれるものがないだろう。木綿を引きながら、「おばばどこへ行きやる三升だるさげて嫁の在所へ孫抱きに…」という歌をおばばが歌う。傍で聞いていると、それはこのおばばで、このおばばが樽を下げて、高畑へんの畑のあいだを、どこか長畝の村の方へでも歩いて行くのが目に見えてくる。おばばは襦からげをして、草履に紐をつけてはいている。お天気はごくいい。しかしおばばは死んでしまったのだから、そんなことはもうないだろう。≫

これは、小学校四年生になった主人公良平が、死んだ「おばば」を哀惜している気持を描いた場面である。「ああ、おばばが死んでしまつて、これから昔話をしてくれるものがないだろう。」という文が基調になっていることからわかるように、ここでは「おばば」の死は、もっぱら昔話や馬鹿話の話し手の喪失、昔からの歌の歌い手の喪失として哀惜されているのである。ここには、小学校四年生の少年が、母親がわりになって自分を手塩にかけて育ててくれた肉親の祖母の死に心をかき乱される生々しい悲しみは少しも描かれていない。ただ一途に昔話や馬鹿話や歌が聞けなくなることを惜しんでいる。たしかにそういうものによって、良平の心は幼いときから郷土の上に想像力の翼をのぼすたのしみを与えられて育ってきたのである。そして、郷土は良平にとって生活の場であるばかりでなく、想像力をひろげる場ともなったのである。夢と現実とが自然に一つにとけあって思い出となる場をもつことができたのである。「わが文学的自伝」のなかで、中野重治は、村の言葉で昔話をするのがうまかった祖母を「語部」という言葉で思い出している。そういえ

ば、ここでの「おばば」の死に対する哀惜は、いわば「語部」の死に対する哀惜として純一化されているのであって、肉親の祖母を哀悼しているものとは思われない。このようにその死が象徴的に描かれているということは、すなわち、『梨花』前半の世界において、「おばば」の存在が象徴的な意味をもつものとして描かれていたということにほかならない。つまり「おばば」の存在は、郷土に根深く土着し郷土そのものとなって、親元を離れて一人「在郷の村」の祖父母のもとに住む良平のおさない心をあたたくつつみ、昔話や伝説や馬鹿話や昔からの歌を聞かせることで、彼の鋭敏な感受性とゆたかな想像力とを育てるものだったのだ。そして、その死は良平の発育史がそういう第一段階をそこで終えたことを象徴的に意味しているのにほかならない。

さて、祖母の死が作品の構成上において持つ意味については、満田郁夫が書き、それをふまえて平野謙が書いている。まず、満田は作品から抽出した良平年譜と中野重治年譜をつき合わせて、その異同をあきらかにし、良平の「おばば」の死が、中野の実際の祖母の死よりも三年くりあげられて描かれている事実を指摘した。^(註1) 中学一年六月のことが小学四年春のこととして、作品のほぼ中央をもってこられ、そこで作品の世界が前半と後半とに分れるように構成されていることをあきらかにした。そして、祖母の死を三年くり上げることの構成上の必要性を、その時点で任地の朝鮮にいる父母、妹たちを良平のまわりに集めることで一つのヤマをつくること、良平が五年生になってまき込まれる「たか、たに、た、ぐち」事件——『梨花』後半のもっとも重要な事件に、妹を立ち合わせるためにその朝鮮からの帰村を良平の四年生の時にすることに認めている。しかし、それでは祖母の死が母妹たちの朝鮮からの帰村の契機としてしか意味をもたないことになり、

「おばば」の死そのものの象徴的な意味はあきらかにされない。

また、平野謙は、祖母の死を良平の中学一年生のできごととして描けば、そこに兄の恋愛問題がからんできたりして、その死が家庭全体に「複雑な翳り」を与え、中学一年生という年齢からして良平の心にも複雑に波及することはさげがたい、そこで「祖母の死をきっかけとする家族間の波紋を、いわば最小限度にくいとめ」るために、三年早めて四年生のこととして描いたのだという。

^(註2) そこに、「資質的に鋭敏な良平の感受性を、できるだけ澄明にすくいあげるため」の操作が行なわれており、作者の「主題の単一化」の意図が見られるという説である。しかし、もし平野謙のこのような意図だったとすれば、『梨花』は良平の中学一年の春までしか書かれていないのであるから、その後のできごとである祖母の死をわざわざ早めて作中に描く必要はかかったはずである。

「おばば」の死が、構成上『梨花』の中央に置かれ、それが作品の世界を前半後半とに分つ分水嶺を成していることはあきらかである。なぜ祖母の死が、良平の小学一年から中学一年にかけての発育史のほぼ中央に位置することになったのか。それをあきらかにするためには、その死と生の意味をあきらかにすることがもとめられるが、平野謙の説も満田郁夫の説もまだそれに充分こたえているとはいいがたい。

そこで、わたくしは、「日本詩歌の思い出」というエッセイとの照応という視点から、あらためて『梨花』の構成上に占める「おばば」の死の意味をさぐっておきたい。それはとりもなおさず、良平の発育史がたどった過程をあきらかにすることになっていく。まず、「日本詩歌の思い出」と『梨花』とが具体的に照応している箇所を、わかりやすいように並べて上げておこう。

〈日本詩歌の思い出〉

A 「山焼ける

はよ行って水かけ」

(中略)「山焼ける」という二行きりの歌は、秋になってあちこちで焼かれる山、その煙を一里半ぐらいの遠さにながめながら、暮れ方橋の上などに立って、二人か三人で元氣よく、しか

〈梨花〉

A' そのあちこちの場所は、去年秋に火が燃えたところだ。火の燃える場所も大抵きまっている。その燃えるのを、橋のところへ出てみんなではやして去年秋眺めたのだ。

「山焼けるッ
はよ行って

しややはかなげに声を揃えて歌うのであった。
これらは口でうたう歌であった。

B 「おばば何処へ行きやる三升樽下げて嫁の在所へ孫抱きに」

「やしゃでやのしゃで
やのしゃでやのしゃで
やしゃでやのしゃで
こちゃ知らぬ」

この「やしゃでやのしゃで」という歌は非常にむずかしいふしまわしであった。文句の意味も到底わからぬものであった。今になっても私にはわかっていない。人にも訊いてみたがやはりわからなかった。「こちゃ知らぬ」という恋愛に関係のある部分が意味の上の内容で、ほかは序のようなものであろうと思っているが確かにはわからない。(中略)百姓の間には非常に高い歌声の男がいて、白髪になるまでも同じ声を保っているのであった。そうして彼らは、大都会では決して聞くことのできない、十分に成熟していながら同時に女や子供のように甲高い、一種純粹な細さを持った彼らの声で「こちゃ知らぬ」とうたうのであった。私は、低いうた声の好きな私にどうしてこれらの声が今までも泌みついてきているのか理解することができない。おそらくあれらの甲高い声、成熟した男や老人たちの非常に高いうた声というのは亡び去るものかもしれない。(中略)これらは私にとって、耳からはいつて心に沁み溜った歌とその声であった。

C まもなく私は竹久夢二と有本芳水とを知った。私は言葉どおりに愛謡の詩人を得たのであった。

「飾磨は古き港にて……」

「広重の海紺の空……」

「郵便箱がどうしたら

そんなにはやく歩くだらう」

「ほほづき取ってもだんないか」

広重が何ものであるかを知り、その他の詩の行をすっかり忘れた後までも、こういう一、二行は私は覚えていた。当時十一、二歳ぐらいであった私は、毎月『日本少年』にのる芳水の詩をことごとく完全に暗誦することができた。

水かけエ」

B' (1) 木綿を引きながら、「おばばどこへ行きやる三升だるさげて嫁の在所へ孫抱きに…」という歌をおばばが歌う。傍で聞いていると、それはこのおばばで、このおばばが樽を下げて、高畑へんの畑のあいだを、どこか長畝の村の方へでも歩いていくのが目に見えてくる。

(2) それから八升鍋の前に坐りこんで、咽喉のなかで鼻唄をうたって昆布をまく。昆布は菓子昆布でない方の薄手のを使う。これも、水でよく洗って、ほとびらして、きれいな、透き通るようなみどり色になった切れのようなのをいくらでも捲く。

「やしゃで
やのしゃで
やのしゃで
やしゃで
やしゃで
やのしゃで

こちゃ知らぬウ」

「何じゃいの、おばば。やしゃでやのしゃでちゅうのは……」

「おいの。何やらの……」

おばばも知らぬらしいが、いつでもそれを歌って、やがて捲けたのが鍋一ぱいになる。

C' そしてそのなかで、良平はひどく好きなものができてきた。それは必ず読む。何べんでも読む。声を出しても読む。そして全部ではないが、あちこちは宙でいえるところもあった。それは有本芳水という人の詩で、竹久夢二という人が挿絵を描いている。(中略)

有本芳水の詩にはわからぬ言葉もあった。それでも読むと気持ちがいい。

「飾磨はふるき港にて……」

(中略)

「紺のはっぴのつばくらめ……」

「広重の空、紺の海……」

「広重の空」というのもわからなかったが、紺の「さっくり」、紺の手甲や脚絆、紺の前かけ、「紺」という一ばん見なれた、何でもないよりは町風でなくて百姓風な切れの色だと思っていたその紺が、そういわれると別物のように見えてくるのが良平には何とも気持ちがいい。

「日本詩歌思い出」のなかで、Aはおさない村の子供たちと声をそろえて歌った「口でうたう歌」として、Bは村の百姓たちが歌うのを聞いて「耳からはいつて心に沁み溜った歌とその声」として中野重治の心に残ったものである。中野は彼の詩心を最初にはぐくんだものとして、これらの郷土の歌に非常に強い愛着を持ちつづけていたと思われる。

たとえば、「やしゃでやのしゃで」という歌については、「自分で歌を書くようになってからは、いつか詩集を出すときにこの歌を扉に印刷したいと思いつづけてきたが、薄っぺらな詩集が編集されてきてみると、あまりの見すばらしさに到底実行する勇気が出ぬのであった」（「日本詩歌の思い出」）と書いているほどである。そして、こういう愛着の深い歌を、『梨の花』のなかでは、死ぬ前の「おばば」に歌わしているのである。「日本詩歌の思い出」の文章によれば、この歌は、とくに「大都会では決して聞くことのできない、十分に成熟していながら同時に女や子供のように甲高い、一種純粋な細さを持った」百姓の男の声によって心に沁み溜ったものであったのだが、それを『梨の花』では、「おばば」に死ぬ前に歌わせているのである。つまり、「おばば」が好きな昆布巻きを巻きながら、「やしゃでやのしゃで」を歌うところや、木綿を引きながら、「おばばどこへ行きやる」を歌うところは、あきらかに作者の意図的な創作として描かれているのである。すなわち、良平の心に郷土の昔からの歌を沁みこませる存在としての「おばば」の姿が浮彫りにされているのである。そういう「おばば」の姿は、良平がその死を何よりもいわば「語部」の喪失として哀惜することとまよく合っているのである。

そこで、「日本詩歌の思い出」と『梨の花』の構成との関係を見て行かなければならないが、「思い出」は三つの段階から構成されている。すなわち、このエッセイでは中野重治が詩人となる過程で出会い、彼の詩心を育ててくれた日本の詩歌についての思い出が、三つの段階をたどって語られている。第一段は、A、Bの例にみられるような、幼少年期（小学校四年ころまで）に村の子供たちと声をそろえて歌った「口でうたう歌」や「耳からはいつて心に沁み溜った歌とその声」についての思い出、第二段は、Cの例にみられるよ

うな、少年雑誌や教科書のなかに活字に印刷された詩を愛誦するようになる小学校五年ころから中学時代にかけての思い出、第三段は、高等学校時代に文学青年の仲間となって、厚星、朔太郎、茂吉らの詩歌集や万葉の歌などの抒情の世界に全身で没入して行く「わが抒情詩時代」の思い出となっている。この「思い出」の三段階は、中野重治が自己の詩人としての発育史をそのようにとらえてふりかえっていることを示すものであろう。

そして、この「日本詩歌の思い出」の三段階の構成は、自伝的作品の構成にもあてはまるものである。すなわち、その第一段階、村の共同体の生活のなかで、郷土の昔からの歌や昔話などを聞いて育つ小学校四年生ころまでの発育史が、『梨の花』の前半の世界に描かれているのである。そして、その第二段階、共同体の世界からしだいに自立し、本のなかに自分ひとりの愛誦詩人を見出し、自己独自の美意識を成長させる姿が、『梨の花』の後半の世界に描かれているのである。ついでにいえば、「思い出」の第三段階——「わが抒情詩時代」を自伝小説風に描いたのが、『歌のわかれ』の世界にほかならない。このように、「日本詩歌の思い出」と『梨の花』とを照応させてみれば、作品の中央に位置する「おばば」の死は、良平の発育史が第一段階——郷土の共同体にすっぽりとつづみこまれてはぐくまれる段階から、その第二段階——共同体からしだいに自己を切り離し自立して行く過程への転換をいわば象徴的に示しているできごとと見るべきであろう。そうすれば、良平が「おばば」の死を、もっぱら昔話や馬鹿話の語り手の喪失、昔からの歌の歌い手の喪失としての哀惜していることもうなづけるのである。

III

このような構成からして、『梨の花』の前半で、良平の心が「おばば」と結びつくことを通じて、郷土に深く密着して育つ姿において描かれているのは当然といわなければなるまい。良平はひとり両親のもとを離れて「在郷の村」の祖父母のもとで育てられているにもかかわらず、「こん在所」の子供として生活することで、郷土と自分を一体のものとして感じているのである。彼の感受性は「こん在所」の個々の具体的な生活と風

土によってつちかわれるのであるから、彼にとって第一義的な真実は「こん在所」の生活と風土とに根ざすものでなければならない。したがって、郷土に密着した彼の鋭敏な感受性は、他所のめぐまれた都会の生活や風土が、あたかも日本全国の模範的なものであるかのように上からおしつけられてくるのには、強く反撥せずにはいられない。

≪「たのしい正月がきました。」

男の子は、たこあげをしてあそびます。

女の子は、はねつきをしてあそびます。

おだやかな元日です。」

「そんな馬鹿なことがどこにあるかいや。」

と良平は思う。

それは、嘘だとは思わない。嘘だとは思わないが、人を馬鹿にしていると思う。良平には、日本中の学校の子供が、ほんとにそう思いこむのではないか気になってさえる。≫

たとえ、東京かどこかに、読み方の本に書かれているようなたのしげな正月があったとしても、良平にとっては、「こん在所」の深い雪の底に埋もれた正月が真実の「正月」なのである。良平には吹雪の中で道を見失い立往生した経験をぬきにして「正月」は考えられない。生活の中で経験したものと本に書かれていることをとりかえることはできないのだ。

≪「女の子は、はねつきをしてあそびます。」

こん在所では、女の子もだれも羽根つきなぞしない。本の絵でみると、たけながをかけた「めえろの子」が、握りへくところがぎざぎざになった羽子板をふりあげて、片手で着物の袖をおさえるようにして振りあおいでいる。あんな着物を着るものも、あんな羽子板を持っているものも、こん在所の女の子には一人もない。別に気の毒ではないが、何となく、東京やそっちの方のもんは、勝手なことをしていると思う。このへんの女の子は、正月に羽根つきはむろんしないが、春になっても、男の子が「いか」を揚げるようになっても羽根つきはしないのだ。町のものがよくないと思う。上等の下肥えができるというのさえ、それは事実らしいが、不埒だという気がする。≫

良平の「こん在所」に対する愛着は、「町のもの」に対する反撥によっていっそう強まるという構造を示している。彼は「こん在所」の側に立ち、一体となって「町のもの」に強く反撥している。それは、一つの共同体のなかに生棲するものが、異質の世界からの圧迫を感じて、それに対抗することによって自己を守りぬこうとする姿勢のあらわれかも知れない。

亀井秀雄は、「中野重治の強さは、どこまでも自己の生れ在所に執着する者の強さであり、そこから言語感覚や美意識を汲み取ってくることできた人間の強さである」(註3)と書いているが、たしかにここには、「自己の生れ在所に執着する者の強さ」が原初的な姿で描かれているのである。また、『梨の花』の構成上からしても、前半の良平は「こん在所」の共同体の生活に密着して育つ少年として描かれなければならなかったのである。

そして、前半での良平の郷土への愛着の強さが、後半での彼独自の美意識の発達とも結びつき、それをささえているように思われる。

≪しかしそこに、その小波に病氣見舞いを出した子供のことが書いてあって、その手紙やらハガキやらが幾つも並んでいるのを見たときには、ほんとに良平は、何か為体の知れぬものに向うからつきあてられた時のようにおどろいてしまった。

どのハガキも、手紙も「小波おじさん……」と書きだしていた。

「小波のおじさん……」と「の」を入れたのものもある。

「小波のおじさん……何じゃい、これや。」

良平には、自分でない、わきの子供の書いた言葉でさえそれが恥ずかしかった。顔が熱くなる。一郎や和子さんの顔も見られない。似たりよったりの中身だったが、よくも、小波が病氣だときいて、そんな、手紙を書いて出すなんという気になれたものだな。そしてそれを、「小波のおじさん……」と書いて書きだすなんということができたもんだな……(中略)

小波が返事を書いてもいた。地獄の門のところまで行ったけれど、閻魔大王が、まだまだ、もう一ぺん帰って、坊ちゃん嬢ちゃんのお相手をしろということだったので、帰って来まし

た、お見舞いありがとうといったことを書いている。

「何じゃい。嘘じゃろう……」と良平が思う。(中略)病気で死にかけたけれど、あぶないところで助かりましたと何で書けぬのかい。みんな、どれもこれも、「たのしい正月がきました。男の子は、たこあげをしてあそびます。女の子は、はねつきをしてあそびます。おだやかな元日です。」といった方の人たちのだろう。苗代もせず、はさ場の手伝いもせず、トラホにも脂目にもならず、雪焼で耳朶にかさぶたも何もできぬとこの、丘やら空地やらがある方の人たちのだろう。それはそれで、別に悪くないが、うらはとにかく、「坊ちゃん嬢ちゃん方」ではないのだ。>

少年雑誌の中に、巖谷小波に出した都会の子供たちの病氣見舞いの手紙やそれに対する小波の返事を見て、それらの調子に対してすどく反撥している良平の反応は、基本的にはさきにした読み方の本の文章に対するものと同じものといえよう。自分の育った世界とは全く異質な世界にぶつつかると、「何か為体の知れぬものに向うからつきあたられた時のおどろいて、ただちにそれにすどい反撥を示すのである。「こん在所」に密着して育ってきた良平の感受性にとっては、都会風ななれなれしきで子供と大人とが手紙のやりとりをする雰囲気、その文章の調子が実質よりも洒落たいいまわしを好むものであるのががまんならないのである。さらに、そういう「あっちの方」の世界のことが、雑誌のなかにれいれいしくかかげられているのが気に入らないのである。そして、「こん在所」の百姓生活のなかで育ってきた自分は、「坊ちゃん嬢ちゃん方」ではないのだという強い拒絶のかたちで自己確認をしているのだ。

なれなれしい、うわついた調子の文章に対する反撥は、良平の一つの美意識の成長をもの語るものであろう。小学四年生になって、書き方の手本の字が嫌いになったとか、教科書の文章の気に入ったところに自然と傍線を引くようになったことと同じく彼の美的感受性の一つのあらわれにほかならない。そして、そういう独自の美意識が、根底において、「あっちの方」の「坊ちゃん嬢ちゃん方」の気楽な世界に対して、自分は雪深い「こん在所」の側に身を置くという一つの倫理的な態

度決定によってささえられているのである。つまり、その二つがわかちがたく結びついてあらわれているところに、彼の面目躍如たるところがあるといえる。

しかし、良平の独自の美意識といっても、それはまだいわば共同体に依存した独自性にほかならない。しかし、二つのものの結びつきがいつまでもこういうふうな自然なかたちで保証されるものではない。むしろ、自己主体が共同体から疎外され、孤立し、引き裂かれる危機のなかで、閉鎖的な共同体からの超出自志向がめばえ、芸術家としての個体発生がはじまるのである。そこにおいては、良平の主体も、いかに郷土への愛着が強いとはいえ、さきに見てきたような「町のもの」と「こん在所」のものとの対立という閉鎖的なワクの中にとどまっているわけにはゆかなくなるのである。

IV

『梨の花』の後半の世界で、「おばば」の死後、良平は、小学校四年生から五年生にかけて、急に書き方の手本の字がいやでたまらなくなったり、きれいな先生に反抵したり、ひとりになって読みふける少年雑誌のなかに自分の好きな詩や絵を発見するようになったりして、自分独自の美意識についての自覚を深めて行く、そして、良平の発育史があらたな段階にはいったことを集中的に示す事件が起こる。それが五年生の春にはじまって、彼が町の中学へ抜け出すまで彼を苦しめつづけることになる「たか、たに、た、ぐち」事件である。

同級生の谷口タニが高田良平にちょっとした親切な態度を示したこと——良平が女の子たちに下駄をかくされて困っていたときに、谷口タニがそれを探してきてやったことがきっかけになって、彼と彼女とは一種の「なじみ」ということにされ、二人の苗字を組み合わせた「たか、たに、た、ぐち」というはやし言葉ではやしたてられるようになる。それが、五年生の間ばかりでなく、全校生徒、村の子供たち全体の間にひろがり、ひとりぼっちにされた良平は、村全体から圧迫され辱められるような困惑と屈辱と苦悩のとりことなる。

≪その途中で、いつどこからそれが飛びだし

てきて、良平のからだにべたりと貼りつくかわからない。それは飛びだしてきて、行きなりべたりと良平の背中に貼りつく。うなじのところに貼りつく。胸とか腹とか、前の方へは決して貼りつかない。貼りついたとわかっていても、手を伸ばして剥ぎとることができない。首の裏だから、顔をねじってそれを見るということができない。守宮^{くわいこ}みたようなものに留まられて、ひやりとする吸盤で吸いつかれたまま、吸盤のぼつぼつを見えぬ部分の皮膚に感じたまま、人はみなそれを見ているが、自分だけは見ることができないで、しかもつめたく吸いつかれています。人から見られていることも、全部知らぬ顔でずうっと我慢し通さなければならない。ただそのままで、我慢することだけのできること。背中を揺すぶって振りおとすこともできない。……それはほんとに辛かった。一と声だけで、良平が、ほおずきの芯を抜かれたようになくなるとなる。からだか そうなってしまう。「たか……」と耳にはいっただけではっとなってしまう。「たか……」——そこでもう、良平は、決して誰がそれをいかけたのか、その方角へ眼をやることだけでもできなくなる。良平は、うつ向きもせず、仰向きもせず、横眼もせず、今までのままでまっすぐに見てまっすぐに歩いて行くほかない……➤

ここで、良平はまるで呪文におびえる未開人のようにおびえている。「たか、たに、た、ぐち」というのはやし言葉は、彼にとってもはやたんなる言葉ではない。それは村のなかを歩いているときいつどこから飛び出してきて襲いかかるかわからぬ得体の知れぬ不気味な生きもののように、彼の肉体に後からじかに襲いかかって来て彼をうちのめしてしまうしろものである。それは外的な打撃というよりも、彼を内的にうちのめし、「芯を抜かれたようになくな」にまいらせてしまうといった性質の打撃である。

なぜ良平は、「たか、たに、た、ぐち」というのはやし言葉にこのように異常におびえ、苦しまなければならないのだろうか。彼自身にも、谷口タニにも何の罪もないというのに……。良平にしてみれば、全く納得の行かぬ理不尽としかいいようのないこの迫害に対して、彼が何一つ有効な反撃をなし得ず、ただひたすら内攻的になって、お

びえ萎縮しなければならなかったのは、これが性と共同体といういずれも不合理でかつ人間の生存の根源にまつわる性質の問題であったからではなからうか。

この事件が起きた「その日」は、五年生になった良平が、四年生のときまでかぶってた蕨^{あざみ}帽子ではなくて大人のかぶる菅笠をはじめてかぶって登校し、「子供ではなくなった。大きくなったという感じ」をいただいた日として描かれている。五年生になると分校の生徒も本校にやってくるという事例からしても、少年少女たちにとって四年生までとはちがう段階——精神的にも肉体的にも発育史が一步大人の方に近づく段階なのであろう。それを良平が意識した日の出来事として、谷口タニとの事件が描かれているのである。すなわち作者は、これを良平の発育史があらたな段階に入り、あらたな問題に直面する事件として意図的に描いているのだと考えねばなるまい。この事件はあからさまに言えば、直接には少年少女たちの性のめざめがひき起こしたものであり、異性への関心が強まる時期に、級長として目立つ存在の男の子と他所者の娘でつんとすました白い顔をした女の子とがその渦中にひき込まれ、いわば一種のいけにえにされたということにならうか。良平自身の内部にも性のめざめに対する警戒心と自己抑圧、それにとまらぬ性へのおびえがあって、事件をいっそう自己内面の危機として苦悩することになったのではなからうか。そういえば、同じ題材を描いた短篇「谷口タニ」のなかには、「もう五年おそかったらただじゃ済まなかったろう……」という主人公の性への怖れを含む回想がある。

この事件が良平をさらに徹底的にうちのめすことになったのは、これが性的なものにとどまらず、閉鎖的な共同体の圧迫というものにひろがったからにちがいない。「孫とおばば」という作品は、『梨の花』の前に「梨の花」という題で書きはじめられて中絶したいわば『梨の花』の原型ともいべき作品であるが、そのなかに良平がつぎのように考えるところがある。「恩地先生——恩地先生が先生をやめた。——恩地のダンナン。——恩地のダンナンが紙屋のおばさんに惚れていた。——恩地先生が逃げていってしまった。——杉岡先生が騎兵から帰った。杉岡先生が紙屋のおばさんを嫁にもろうてくれと家でいうた。——紙屋がわきからきたというのであかんといわれた。

——それで杉岡先生が死んだ。——杉岡先生はわが身で首をくくって死んだ。——紙屋がどこかへ行ってしもうた。——その跡が斬髪屋になった。(中略)——大人というものは変なものだなと良平が思う。——おじさんやおばばに訊いてみようかとも思うが訊いても駄目だという気がする。」ここで良平の心に「変なもの」として暗い影を落しているのは、杉岡先生のような好青年が他所者の女に惚れて結婚を認められず首つり自殺をしてしまうというようなかたちであられる、共同体の閉鎖性のなかで性的問題をめぐって大人たちがおりなす悲劇的で非合理的な人生模様にはかならない。良平の鋭敏な感受性は、それがおじさん(祖母)やおばば(祖母)に訊いてもあきらかにならない非合理的なものに根ざすものであることを感じとっていたのである。そういえば、杉岡先生の自殺の原因となった紙屋のおばさんが逃げ出して行った跡に他所から越してきた斬髪屋の娘が、ほかならぬ谷口タニであるということで、良平は彼女と「なじみ」とされることに異常な警戒心とおびえとをいだいたのかも知れない。それはともかく、良平の鋭敏な感受性が、村の共同体の閉鎖性をなんだかわからぬが息苦しいものとして感じていたのではないかと思われるふしが「孫とおばば」に描かれている良平のつぎのような不可解な夢のなかにある。

《いつからかは知らぬが、良平は、からだがテキない(苦しい)時は象の夢を見るようになっていた。それは象だ。ほんとの象を良平は見たことはない。しかし象にはちがいない。あまり大きくはない。モンノチ(門のうち家の名、小杉という——家のイメナ)の牛ぐらいの大きさだ。それが六七匹でぐるりと良平を囲んでいる。象は尻と後脚を地面につけて——後脚を前へ伸ばして地面につけている。——手は前へ上げて伸ばしている。鼻も、いくらか曲がっているが前へ伸ばしている。その象の輪のまんなか良平がいる。良平はジョロ(あぐら)をかいて坐っている。その良平を象が鼻でなぶる。鼻で小突くようにする。それ以上は何もしない。ゆらゆらする鼻のさきで、良平の肩をさわったり、胸を押したり、頬をつついたりする。痛くはない。声は何も出さぬ。それで良平は、何だか知らぬが苦しくて仕方がない。心がつらくて

仕方がない。輪から逃げ出そうにもどうしても出られない。象が出てはならぬぞといったわけではないが、出られぬことになっている。だから良平は立って逃げようとやってみたこともない。この夢を必ず見る。》

この「象の夢」は、「孫とおばば」のなかでもっとも重要な、しかもきわめて不可解なイメージである。この夢は作品のなかにあても深い沼のようにあられ、それに作者が足をとられ前に進めなくなって作品を中絶せざるを得なかったのではないかとさえ思われてくる。この夢のなかに、おそらく良平が無意識の深層で感じていた閉鎖的共同体の言いあらわしがたい禁圧感が表出されているとみてよいのではなからうか。良平をとりまいてなぶる象の「輪」は、実は彼がひそかに感じていた閉鎖的共同体の禁圧の「輪」にはかならないのではなからうか。

とにかく、われわれはここで、良平と郷土との結びつきが、『梨の花』前半に見られるような強い愛着という一面だけではとらえがたいのではないかということに気づかせられる。表に強くあらわれているポジティブな愛着の裏には、そのネガティブとしての禁圧がひそんでいることを見のがしてはなるまい。『梨の花』の前半ではさきに見たような構成によって、良平と郷土との一体感がもっぱら強調され、そのネガティブな面は捨象されていて、「象の夢」のことは出てこない。切り捨てられた「象の夢」は、『梨の花』後半の「たか、たに、た、ぐち」事件のなかに姿をかえて噴出していると考えられる。良平が村なかを歩いている時に「たか、たに、……」というはやし言葉でなぶりものにされて感じるどうしよらもない心の苦しさ、つらさは、あの夢の中で象の輪にかこまれて鼻でなぶられる時に感じる心の苦しさ、つらさと同じ性質のもので、他人に説明することのできない非合理的な苦悩なのである。それをもたらすのが、閉鎖的共同体の禁圧の「輪」なのである。

満田郁夫は、この「たか、たに、た、ぐち」事件をもっぱら良平の内部における都市と農村、町と村との分裂という視点から追求しているが、わたくしはそういう視点からではこの事件のもつ真の意味はあきらかにしきれないのではないかと考えている。良平が町に生まれて農村に帰ってき

た、もともと他所者であるから、こんな事件にまき込まれたというよりも、ある段階まで共同体にすっぽりとつつまれて成長してきた少年が、共同体から自己主体を分離し、その禁庄の「輪」からの離脱・超出を志向しつつ自立して行く過程でだけがたくぶつつかる問題としてみるべきであろう。

短編「谷口タニ」のなかでは、「早く大きくなりたい、大人になっちまいたい。大人にさえなっちまえば何でもない。あいつらも卒業してしまう。おれは東京へ行ってえらいもんになるんだ……」と、閉鎖的共同体からの超出志向が単純率直に表白されていた。さて、『梨の花』のばあいはどうか。良平は、共同体の禁庄の「輪」をどのように超出して行くのか。

「たか、たに、た、ぐち」事件という「誰にどういいようもない、またそれと喧嘩することもできないこの災難のため、良平は、一人でぼつんとして本を読むようになった。」このように、村の子供たちの仲間から孤立し、ひとり本の世界のなかにわけ入って、彼はしだいに自己独自の美意識を確立して行く。少年雑誌の中に、愛語詩人有本芳水を見出し、その詩句を好んで誦誦するようになるが、そのことを話してわかってもらえる同級生は一人もいないので、誰にも話さない。つまり、孤独のなかで良平はあらたな美に眼を開かれて行く。

≪「紺のはつびのつばくらめ……」

「広重の空、紺の海……」

「広重の空」というのもわからなかったが、紺の「さっくり」、紺の手甲や脚絆、紺の前かけ、「紺」という一ばん見なれた、何でもないよりは町風ではなくて百姓風な切れ色だと思っていたその「紺」が、こういわれると別物のように見えるのが良平には何とも気持ちがいい。>

「わが文学的自伝」によれば、中野重治は、小学校五年生ころから、「少年世界」や「日本少年」などの雑誌類を自分で買って読むようになり、そのなかで詩や絵の美しさに眼を開かれたという。たとえば、油絵の美しさにふれた時のことを、「ああ、実に実に絵の世界は私を引きつけた。私は川端竜子の絵を模写しさえした。不幸なことに川端は油でかいていた。木炭紙の上へ、細

い水絵の具の筆でブラッシュの刷毛目を出そうとして私は実に苦心した」と語っている。そういう少年期の感動的な美意識の発達が、『梨の花』のなかでは、良平が油絵によって「梨の花」の美しさをはじめて発見する場面に象徴的に描かれている。

≪『日本少年』のは絵に、「梨の花」という題の油絵がはいっていた。色のなかに細いすじのようなものが一ぱいに詰まっている絵、あれは油絵というものと良平はもう知っていたが、その絵は、梨の木の花が咲いているというだけの絵だったが、見るからに美しかった。絵がうつくしい……「梨の花ア……」と良平はへんに思った。梨の花がこんなに美しいことがあるもんか。梨の木は、おじさんが癖で植えたものが灰小舎の傍にあった。毎年花が咲く。そして食べられぬほどのがじがじ梨が成った。あの梨の花が、美しかったもんか。良平には、梨の花を美しいと思ったことは一ぺんもなかった。一郎でも誰でも、梨の花が美しいなんといったものは一人もなかった。大人にもない。>

ここで良平は、村の大人も子供も誰ひとりとして美しいとはいわぬ「梨の花」の美しさを油絵によっておしえられ、新鮮なおどろきをもって眼をひらいているのである。そのひらかれた眼をもって、誰も気づかなかった「梨の花」の美しさを発見する。

≪「どら……」

良平は灰小舎の前へ行って見た。梨の花は咲いていた。そしてそれがほんとに美しかった。絵の通りだった。何の変哲もない、白っぽい花、それが何で美しいんだろうと思ったがそれはそこで行きどまりになった。とにかく、灰小舎の前で、今まで一ぺんも、花が咲くということさえ気にしたことなかった梨の花が美しく咲いていた。>

これは、『梨の花』のなかで良平の独自の美意識の成長をあざやかにもの語っている象徴的な場面である。表題もここからとられている。もちろんあらたな美への開眼は、良平にとってたんに美へのめざめを意味するものではない。それは深い

ところで性のめざめにもつながっているようにも思われる。白っぽい「梨の花」と谷口タニのつんとすました白い顔とは良平のなかのどこかで重なっていたはずである。

さて、「谷口タニ」の主人公山屋善作は、村の共同体の仲間から「やま、たに、や、ぐち」となぶりものにされ、疎外され圧迫されて苦しんだとき、「おれは東京へ行ってえらいもんになるんだ……」という超出志向でそれをのりこえようとしたが、同じような状況に置かれた『梨の花』の高田良平の場合は、彼の共同体から超出志向はまずあらたな自己独自の美の発見に向う。仲間から疎外された孤独のなかでひとり本の世界にわけ入り、そのなかに自分を引きつける詩や絵の美しさを発見し、自己独自の美意識を成長させ、現実において自己を緊縛しているものから自己の内面を脱皮させ、共同体の禁圧から自己の精神を自立させて行く。そういう禁圧の「輪」をやぶって行こうとする超出志向にともなう精神の緊張が、詩や絵の美しさへの開眼をうながしたのであり、共同体に埋没している者にとっては「何の変哲もない、白っぽい花」が絵のように美しく見えてくるのである。したがって、良平が現実において村の生活からぬけ出し、町の中学生になって、「たか、たに、た、ぐち」事件の圧迫から解放されると、そういう精神の緊張も解消し、「梨の花」もまた「何の変哲もない、白っぽい花」としてしか眼に映らなくなるのである。つまり、同一の「梨の花」が美しく見えたり見えなかったりするという良平の美意識の変化は、彼の内面的な発育史を象徴するものにほかならないのである。そうしてこれまでみてきたところから、そういう良平の発育史が、中野重治の「わが文学的自伝」や「日本詩歌の思い出」の線上に構成され、描かれていることがわかる。

V

「わが文学的自伝」や「日本詩歌の思い出」からうかがわれるように、小学校五年生ころの中野重治に有本芳水の詩や川端電子の油絵をもたらした「少年世界」や「日本少年」という雑誌は、いわば農村共同体の「輪」の外側から都会の新文明を運んでくる使者みたくのものであった。そしてその使者によってもたらされる新しいものへの接近に際して、彼の鋭敏な感受性が微妙にふるえ、

屈折を示したのであろうことは想像にかたくない。それが『梨の花』のなかでは、たとえばつぎのような場合に描かれている。良平が「少年世界」「日本少年」の広告で知った森永の「ミルクキャラメル」という新しいお菓子が近くの町の店にやってきた日に、それを買いに行く場面である。

≪九月の終りで、暑い日曜日だった。良平は日曜日をえらんだ。日曜で昼めしのすんだ時分。大人は、町でも昼寝する家が多い。子供は、この時刻に一ばん通りへ出ていない。「たかたに……」の心配が一ばん少い。(中略)良平は、あれを一と声も浴びせられないで新屋敷屋の店へは行って行った。

「何あげますかいの。」と出てきたおんさんがいう。このおんさんは前歯が抜けいて、ふがふが声を出す。

「森永のミ・ル・クキヤ・メ・ルくんないま……」

何んでそんなことになったのか自分でもわからなかった。この一と言が、良平の口からどうしても声になって出ないのだった。何でだか。誰も口でいったことのない新しいお菓子の名を、いいにくいのもあるが、いうのが恥ずかしい。ただはずかしい。「ミルク……」と考えただけで、動悸が打ってくる。「ミルク……」とまで出かかったのがそこで止まってしまって、おんさんが良平の口もとを見ているのがわかると良平はますますあわててきた。

「ミンツ……」と良平は行ってしまった。

良平は逃げるようにしてミンツの小箱を握って家へ走って帰った。西瓜屋を出はざれるまでは我慢して歩いたが、家へ近くなるほど良平は一そう速く走らずにいられなかった。➤

待ちどおしがっていた「ミルクキャラメル」の名がいえなくて逃げ帰る良平のなかには、まるで禁断の木の実を盗もうとした人間が自分の行為に突然罪を感じるかのようなはげしい全身的な羞恥と意識の屈折とがみられる。鋭敏な触覚が異物にふれて反射的にひっ込むような意識の屈折である。妹たちが都会風な言葉づかいをするのを聞いて良平が感じる羞恥も同じような性質のものであろう。良平が人眼をおそれ、「たか、たに…」におびえながら、こっそりと近くの町の店へ新しいお菓子

を買いに出かけて、どたんばでその名を口に出せず、村の家へ逃げ帰る姿は、まさに彼の意識が「こん在所」への執着心と新しい外の世界への超出志向との間を微妙にしかもはげしくゆれていたことを如実に示しているように思われる。同じ雑誌がもたらす新しいものへの接近といっても、詩や絵のばあいには、すでにみてきたようにこんな意識の屈折が見られなかった。それは美への超出は、いわば孤かな精神のいとなみとして内面的に行なわれるものだからであろうか。それにくらべてころいう生活にかかわることがら、倫理にかかわることがらにおいては、なお超出を許さぬ土着的な意識と感性とが良平のなかで根強くはたらいていたということであろう。もちろん良平のなかでは美意識と倫理意識とは密接にからみ合って作用しているのであり、ふりかえてみれば、雑誌のなかでの詩や絵との出会いのばあいにおいても、良平の心はそれに引かれっぱなしになってしまうのではなく、その出会いによって開かれた眼をもって百姓風な「紺」の色の美しさ、村で見なれた「梨の花」の美しさをあらためてふりかえて見なおしているのである。

ともかく、『梨の花』後半の世界に描かれた良平の発育史を、彼が育った農村共同体からしだいに離脱し自立して行く過程としてみると、その過程において、彼の心が「こん在所」への根強い執着とその閉鎖性からの超出という対極的な二つの志向の間をゆれうごき緊張をはらんでいたことに注目しなければならない。彼の美意識と倫理意識とは、あたかもこの二つの極の間に張られた一本の強靱な弦のようなものとして成長し、そのふるえが彼の鋭敏な感受性の反応とてあらわれるのである。ここに中野重治の精神の運動の原型を見ることができる。その都度その精神の運動を両極からかきたてたものは短歌的抒情と観念的福本イズム、土着的なものと同洋派的なもの、ナショナルなものと同インテリゲンシャルなものとのさまざまであったがその根源には、郷土への溯源志向と新しい世界への超出志向とがあったのである。そしてその両極を美意識と倫理意識とをない合わせた一本の強靱な弦によってつなぎとめることによって、中野の芸術と思想とはささえられているのである。もしその緊張にたえられず、二つの極がバラバラになってしまったり、一方の極に停止してしまったりすることがあれば、中野重治の芸術

と思想はその意味を失うことになろう。だからこそ、転向の問題を根源的につきつめて描いた『村の家』において、勉次は父孫蔵の説く村の生活と共同体のきびしい倫理に深く心を引かれて自己のあやまりをふりかえりながら、しかし、筆を捨てて村に帰って百姓をせいという父の言葉には従うことができず、それに従ったら自分はおしまいだと思って、やはり書いて行きますと答えざるを得なかったのだ。それは、まさに中野重治の芸術と思想とが一つの極に停止して亡びるか否かのせとぎわであらためて示された精神の運動の根源的な姿にほかならない。

さてもう一度『梨の花』にもどってみれば、あの「たか、たに、た、ぐち」事件は、良平の超出志向をみちびき出すために設定された事件にほかならなかったのである。にもかかわらず、「谷口タニ」にあるような「おれは東京へ行ってえらいもんになるんだ……」というむき出しの超出志向は、良平には最後まで見られない。彼は彼を疎外し圧迫する共同体の閉鎖性に対して、それへの反抗として超出志向を意志的につきつけようとは一度もしないのである。実際には良平は村の小学校の六年生の中からただ一人の町の中学校へ進学することで村の仲間からぬけ出し、それによって二年間彼を苦しめつづけてきた「たか、たに、た、ぐち」事件からも解放されることになるにもかかわらず、それは彼の主体的な行為によるものとしては描かれていない。彼の意志とは全くかわりのない事の成りゆきのように描かれている。第一、良平の発育史にとって重大な意味をもつはずの町の中学への進学が、良平自身にははっきりした進学の意志もないままに、いつの間にか何となく行くことになるというふうに描かれている。むしろ良平は、カバト監獄署滞りの「おんさん」に、「良ちゃんらも、県立へ行って、それから高等学校へ行って、帝大へ行かなあかんぞ。」「林の家なんぞア、見かやいてやらなああかんがいの。」という思いがけないはげしい言葉をかけられて、迷惑に思うばかりである。この「おんさん」の言葉は、いつも「こん在所」の共同体のどん底に疎外されて生きてきた者のはげしく鬱屈した超出志向の噴出を良平に向けて投影したものにほかならないのだが、良平はそういうものを自分のなかのみとめようとはしない。かといって、それにかわる良平なりの中学進学の本質と目的とははっきりあ

るわけではなく、ただなんとなくあいまいなままに町の中学へ行くことになるのである。あれほど「こん在所」に強く執着していた良平にとって、同級生の中からただ一人町の中学に進学することがそれほどんきにかまえていられる性質の問題であつたらうか。

良平の後半の行動で、もう一つわかりにくい点がある。もともと良平は自分に加えられた理不尽な迫害や侮辱に対してはただちに反撃せずにはいられない、きわめて自恃心の強い少年として描かれていた。たとえば、彼が仕出かしたちよとした火遊びの不仕末を大人たちが大げにさわぎたて、無理やりあやまらされたとき、彼は「大人は勝手なことをする……」と怒り、「泣いても泣いてもこれには埋めあわせがつかぬように思う」とくやしがり、その仕返しに「こんだは、しょんべんを飲んでやるぞ」という奇抜な反逆を思いつく。また教室でさわいだとき、先生から「豚」とか「猫」という言葉で説教されると、さわいだことは悪かったが、「豚」「猫」と「ブジョク」された分だけは取りかえしておかないと釣合いがとれないと反抵的な行為に出てしまう。ところが、そういう良平がもっとも理不尽な迫害と大がかりな侮辱とを加えられることになった「たか、たに、た、ぐち」事件のばあいには、どうしたとか、それを取りかえす行為に出ることができない。目の前で谷口タニが村の男の子たちにとりかこまれていじめられる姿を目撃しても、それが自分に対する迫害と侮辱とにかかわりがあるにもかかわらず、それに積極的に立ち向かって行くことができない。これは自恃心の強い感受性の鋭い良平の態度としてはふさわしくないのではないか。

「たか、たに、た、ぐち」事件のばあいにかぎって、どうして良平はこうふがなくなるのだろうか。まず、相手が質的にちがうということがある。個々の事例のばあいは、相手が個別的、具体的に反応の仕方も一時的、感性的ですむ。しかし、共同体相手のばあいは、それではすまない。それまで自分もその一員であつた村の仲間全部が相手でしかも二年がかりともなると、それが共同体の不合理な心情の噴出としておそいかかってくるということもあって、一時的、感性的反応では対応できなくなる。目の前の一人一人につかかって行ってもどうにもならない。意志的持続的対決の姿勢が必要となってくる。共同体に

対するそういう姿勢が良平の内部で明確にならない。さきにみたように、町の中学に進学するという行為も、主体的な意志があいまいなままになされるにすぎない。つまり、良平の侮辱に対する鋭い自恃心の発動は、あくまで彼の鋭敏な感受性の一時的、感性的な反応としてはげしくあらわれ、そのあらわれ方に、まぎれもない潔癖な個性を見ることはできるが、意志的なものとなって持続されるという強さは持たない。そういう良平の弱さは、『梨の花』の結びのイメージにまで尾をひいている。

≪「しかしおみ堂の屋根へはそのうち上つてやろう。」

英語からふいにおみ堂だったがそれは前々から思っていたことだった。いつか内藤君がちょっと匂わしていたが、きっと内藤君は、あそこへは恐しくてのぼれぬのかも知れんぞ。ひろい屋根一ぱいの屋根互がずっと葺きあがっていて、中ごろまでそれがはすかいに迫りあがっている。中頃すぎて急になる。それから段々に反って行ってますます急になり、一ばん上へ行くときほとんど垂直になる。そしてその上へ、全く垂直の棟のところぐる。その両端に鬼互がある。あそこへのぼって、天辺まで行ってやろう。這って行けばいい。這って行く自分の姿が見える。高いので小さく見えている。≫

これが『梨の花』全体の結びのイメージで、良平の未来を暗示して終っている。ところで、これは内部の超出志向を絵にかいたようなものではないか。とすれば、これまでみてきた作品の構成からして結びにふさわしいイメージということになる。ところが、よく考えてみると、けっしてそうはなっていない。これは、良平が村から町の中学へ出て来たばかりの田舎者で、電気ということをわらいものにした町の中学生内藤君の侮辱に対する仕返しのイメージとして、良平の頭のなかにうかんだものにすぎないのである。つまり、ちよとした侮辱にいらだつた良平の鋭敏な感受性の一時的・感性的反撃のイメージ化にすぎない。もし、これまでみてきた『梨の花』後半の構成に忠実であるならば、この結びにイメージ化されている良平内部の超出志向は、まず第一に彼を二年が

かりで苦しめてきた村の共同体の閉鎖性に向けられるべきものであろう。そうすれば、このイメージは、『梨の花』後半の良平の発育史をしめくくる実質的なイメージとしていっそう深められたであろう。

そうならなかったのは、中野重治が、良平のなかにうかび上ってきたもっとも重要な課題——溯源志向と超出志向との矛盾葛藤を徹底的に問いつめることをせず、途中からまた村と町の対立というワクの中に横すべりさせてしまい、中学生になった良平の心を甘い村への愛着とあいまいな町への融合との間にただよわせてしまったからである。良平の内部の矛盾葛藤があいまいなると、村への愛着も、「人間がみな、馬、牛、犬さえも百姓だけである村。田圃も、畑も、あぜ道も、用水も、橋も、何もかも百姓のもので百姓仕事に使われている村。そこへ帰りたかった。」というような甘い感傷的なものになってしまう。『梨の花』後半で良平の眼に見えてきていた村の内部はけっしてこんな平板なものではなかったはずだ。

中野重治は、『梨の花』で、たんに少年時代の自画像を描きたかったのではあるまい。「作そのものとしていえば、これは作者の生立ちの記のようなものである。ある地方の農村の、ある階層に生まれた一人の男の子供がどんなふうになんて行くか、それを、小学校一年生あたりから中学校一年生あたりへかけて描いたものである。」

(「作者あとがき」という言葉からもうかがわれるように、「作者の生立ちの記のようなもの」であると同時に、地方の農村に生まれ育ち、やがて村を出て知識人、芸術家となって都市生活をするようになる種類の人間の、少年期における人間形成の問題を追求したものとして描きたかったにちがいない。そのことは、これまでみてきた作品の構造からしてもあきらかである。そのばあい、良平が最後によつつかる問題——郷土への愛着と共同体からの超出との矛盾葛藤がもっとも重要な問題となるのである。もちろん、中野重治自身の革命家・芸術家としての生涯にとっても重要な課題である。つきつめれば、それは、自己の個と共同体との関係をどのようなものにして行くか、美と倫理、文学芸術と政治社会とをどのような関係で切ったり、つないだりして行くかという問題になって行くだろう。そういう重要な問題をはらむ矛盾葛藤が最後に行くにしたがってあいまいにされているのがおしまれる

注

- (1) 満田郁夫「『梨の花』について」(『中野重治論』新書所収)
- (2) 平野謙『梨の花』「解説」(新潮文庫)
- (3) 亀井秀雄「梨の花」(『中野重治論』三一書房所収)

On *Nashi no Hana*

Yukio KIMURA

Nashi no Hana, by Nakano Shigeharu, is one of his autobiographical novels. In this work Nakano described the experiences and emotions of his boyhood. He had gratitude to his native place and thought that it was a sort of the inner duty of a writer to write to express it. This novel was written with such affection to his country.

This is composed of the first half and latter half. In the first half the hero is nursed by his grandmother, hearing the legends, silly talks and folk-songs, and attached deeply to his native place. After the grandmothers death, in the latter half, he discovers his favorite poems and pictures in the books and becomes an independent boy.

In this essay, I attempt to approach to the composition of this work and the connection between the hero's aesthetic consciousness and morals.